

植	物	
防	疫	
講	座	

虫害編-34

ニホンナシに発生する害虫の生態と防除

千葉県農林総合研究センター 清 水 けん

はじめに

国内のニホンナシにおいて発生する主要な害虫相は、過去10年程度の期間の中では劇的な変化はない。しかし近年、それぞれの pest status には大きな変化が見られている。ジアミド系殺虫剤各種の登場以降、チョウ目害虫全般は以前に比べると大きな問題にはなりにくくなった。一方で、ハダニ類は新規の殺ダニ剤に対しても感受性を低下させた個体群が各地で発生し、大きな問題となっている(飯塚ら, 2018; 三代, 2021)。また、ニセナシサビダニは病原ウイルスの媒介者としての側面から新たな問題として認識された(KUBOTA et al., 2020)。これら害虫類を対象とする防除体系も、様相が変わってきている。近年では、ナシ園内において発生する土着天敵類を活用した生物的防除技術やIPM体系の開発が進んでおり、それに伴って、従来よりも選択性の高い殺虫剤の使用が推奨される場面が増えている(千葉県, 2020; 農研機構果樹茶業研究部門, 2020)。広スペクトラム殺虫剤を使用した単純な「一網打尽」を狙った防除については、再検討が必要とされる状況も多くなってきた。また、昨今の気候変動が一因となり(環境省ら, 2018)、発生時期および防除適期の年次変動が無視できない害虫種も増加している。本稿では、昨今のニホンナシの主要

害虫として挙げられる種や、新たな防除手法が開発された種について、千葉県で得られた知見に基づいて、その生態と防除のポイントについて解説する。

I ハダニ類 (ナミハダニ *Tetranychus urticae*, カンザワハダニ *Tetranychus kanzawai*)

ナシ園では主にナミハダニとカンザワハダニが発生する(図-1)。ハダニ類は梅雨明けころから新梢葉上で急激に増加し、多発生すると9月ころに早期落葉を引き起こす(図-2)。早期落葉は翌年の樹勢を低下させるだけでなく、本来の開花時期とは異なる秋期に開花を誘発することにより、翌年の開花が見込めなくなる枝を発生させる。ハダニ類が主に葉だけを加害する害虫だからといって軽視できないのは、このためである。

各種殺ダニ剤に対する感受性低下が顕著なナミハダニへの対策として、殺ダニ剤への依存度を下げたIPM防除体系の確立が進められてきた(農研機構果樹茶業研究部門, 2020)。この防除体系の中では、ハダニ類の増殖が始まる梅雨明けころの樹上に、土着天敵であるミヤコカブリダニやニセラーゴカブリダニ等の発生を促すことがポイントとなる(図-3)。カブリダニ類は多くの生産者にとって肉眼での確認は難しいが、ナシ園に「いる前提」で「減らさない」工夫をすることが必要となる。実

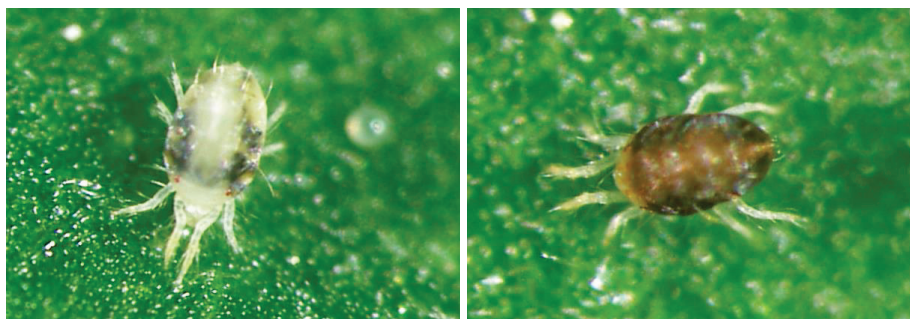


図-1 ナミハダニ雌成虫(左)とカンザワハダニ雌成虫(右)

Insect and Mite Pests on Japanese Pear in Japan: Ecology and Control. By Ken SHIMIZU

(キーワード: ニホンナシ, 害虫, 生態, 防除)